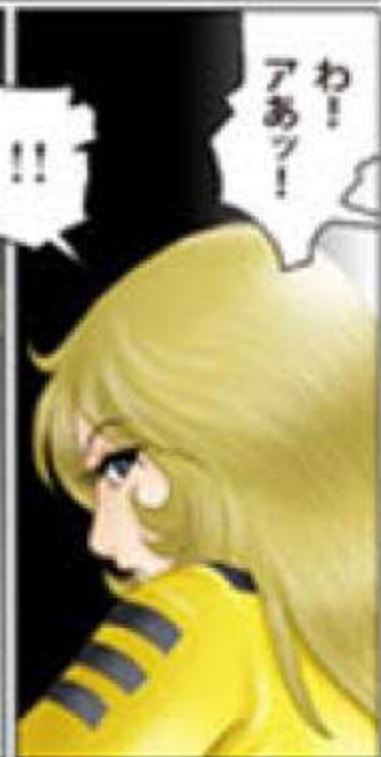




さよなら
YAMATO

by 七陽





西暦二〇××年

私たちの艦（ふね）は長い航海の途中、地球防衛軍司令長官からの要請で、ある惑星へ錨を降ろした。

時間に余裕のない行程の中でのスケジュール変更

にコダイく…、艦長は

強く抵抗したが、結局は

要請を受け入れざるを得なかった。

そして私と、コダ…、私の愛する夫の運命を大きく狂わせる

この星へむけて

艦は急ピッチで舵をきった…。



……ん、
ムムム
ムムム……



あなたは
……誰？

私たちの
降り立った
この星の住人、
マラー君……。
これが彼との出会いだった。






この日より二日前、
命令をより早急に完了させるため、
総員フル稼働で、私もまた
単独で任務にあたっていた。

そしてその帰艦の途中、
突然の小型艇の
操縦不能に見舞われ、
私はこの辺りへの不時着を
余儀なくされた。

その際の衝撃で
気を失った私を偶然見つけ、
意識を取り戻すまで
介抱し、守ってくれていたのが
彼だった。




機体の損傷は
思ったよりも酷く、
母艦との連絡も
不可能な
状態だった。

けれど、
何とか母艦と
自分の位置だけは
特定でき、その距離は
それほど離れては
いないことを知った。



ユキ…
帰ルのカ?

そして夫を
先頭に、仲間が私を
必死に搜索して
くれていることも…。



私はマラー君に道案内をお願いした。
まだ十分に成人していなそうな彼に頼るのは心苦しかったが、
彼の安全を最優先させる事を心に誓いながら…。
艦にさえたどり着けば今度は安全にこのコを送り返す事もできる。

ごめんなさい…
あなたの事は
私が必ず守るから
…お願い、マラーくん

「さあ、行きましょう」 出立を急ぐ私に彼は少し複雑な表情を見せた。
それは道程への不安ではなく、私に対するまったく
別の感情によるものだったと、今なら推測ができる。
けれど…その時の私には、
そういった想いをめぐらせる余裕すらなかった。

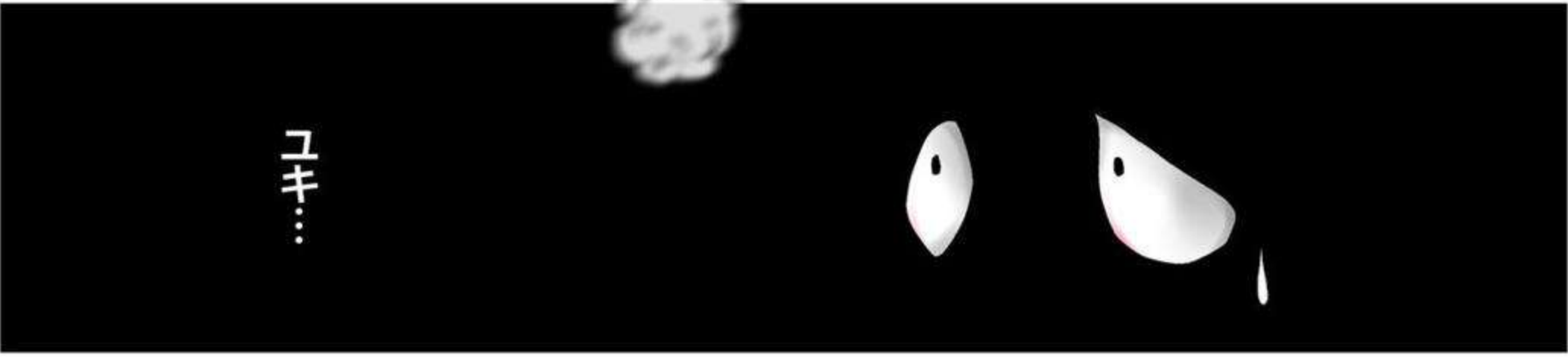
艦がこの星に留まって
いられる時間は
限られているのだから…。

さよなら

YAMATO

by 七陽





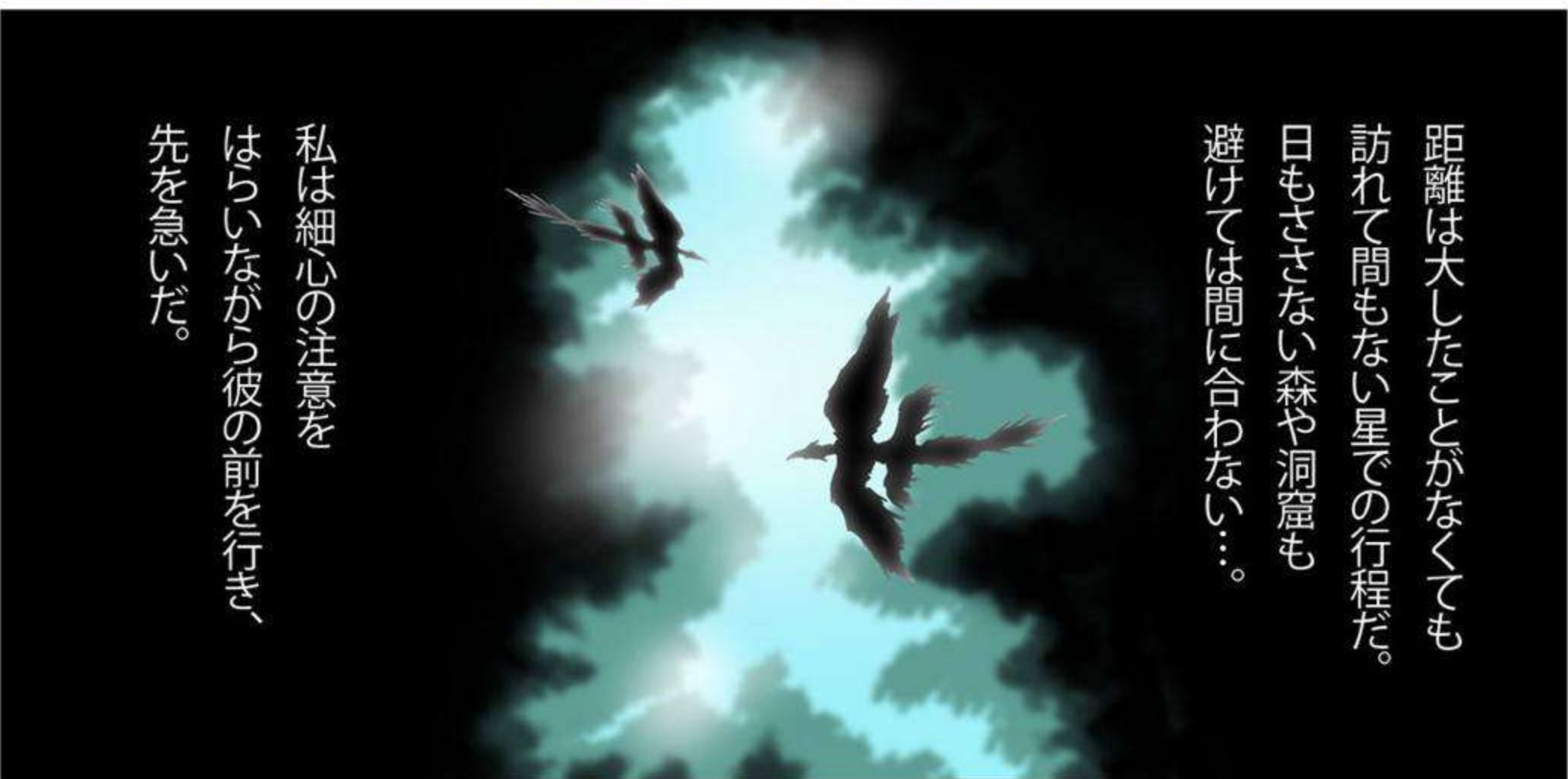
ユキ……



大丈夫……
信じて
マラーくん
……お願い


言葉や意思の疎通も拙いままでの
彼との二人旅は私にも
不安の大きいものだった。

しかし、何があっても
私を助けてくれた
彼だけは守る……
その意思だけはまったく
揺るがなかった。




距離は大したことがなくても
訪れて間もない星での行程だ。
日もささない森や洞窟も
避けては間に合わない……。

私は細心の注意を
はらいながら彼の前をいき、
先を急いだ。



ここがいいのね？
足場が悪いから
気をつけて…

それでも
今思えば迂闊
だったとしか
言いようがない。



マラー君を守り抜くこと…。そして一刻も早く
私を心配して待つであろう仲間と
愛する夫の元へ帰り着くこと…。
それらに強く心を捕われすぎたまま
私はその洞窟へと足を踏み入れて
しまったのだ。

私たち地球人と同じには
考えられなかったけれど…

植物のつるが
すごいわね…

彼も多感な時期の
男性だったのに、
私はそついった事に
無防備すぎた。

ゆ…
ユキ…

わ!
アあッ!

!!

マラー
くんつ!





這い回るつるに彼が
絡まれようとしているのを
見た私は

守ろうと
するあまりに、
我を忘れ自分がかわりに
捕われの身と
なってしまった。



落ち着いて、
彼を捕えたつるを
銃で焼き切ればよかった
はずなのに...。

ああ...

「大丈夫？マラーくん…」

「う…うん」

私は彼の無事を確認しつつ、なんとかつるをほどけないかと、もがいていた。

しかし、もがけばもがく程

つるは私の腕を強く締め上げた。

そしてその事によって、私はマラー君におおいかぶさり彼を自分の胸に深く抱きしめる体勢になってしまった。

そう、彼の男としての本能を自ら

激しく刺激してしまったのだ…。

「ゆ…チキ…」





彼は私の胸に
顔をうずめ、
キツく抱きしめて
きた…。
「あ、あまり
動かないで…
マラーくん」



「今…
何とかするから」
なのに私は
この時、自分の
腰を強く
擦り付けてくる
彼の昂りにさえ
気がついて
いなかった。



「ユキ…のかうだ
キもちイい……
トてもー!」
「え……っ?」



不注意で落としてしまった
この銃に手が届けば…
私の意識には
それしかなかったのだ。



「あ…っ！」

私はやっこの時に
彼が性的に興奮

していることに

気がついた…。

「ユ…キ、帰り

ないで…！」

「マ…マラーくん？」



「ユキ…このママオレとママデ暮らそう…」

「だ、だめよマラーくん。やめて？」

彼は私の身体を全身でむさぼり始めた。

「お願い！」

マラーくん私には

愛する夫がいるの…だから」



「オレがナル…
……夫！」

「あ…
だ、だめ
そこ…」

あっ！

「オレの子供
産んで…ユキ」



「だめ！
やめ…て
マラーくん
…ん…っ！
お願い」

彼は夢中で
私の股間を
まさぐった。

「ユキ…！ユキッ！」

もう私の言葉などまるで
届いていないようだった。
息を荒くして、
大きく開かれた私の
ソコを撫でまわし、
指でなぞり、
私の身体をこじ開け
よつと必死に…。



あ…っ！
い……

いや……
……っ

抵抗する私の声は
彼をさらに欲情
させてしまっ…。
そう知りながらも
この時の私は
言葉でしか
彼を抑える
すべが無かった。



「気持ちいいか？ユキ？」
彼の言葉を
私はすぐに
否定すべきだった…。
けれどその声は
きつともっと
艶かしくあえいで
しまっだろう…。



私はもう、唇を
固く噛み締め、
首を横に振る事
しかできなかつた。
「ん…っ！…ん…」
「もっと気持ちよく
してやる…ユキ…」
彼は私のスーツを
剥きはじめた。



そしてその長い舌で
ものすごい量の
唾液を首筋へ何度も
塗り付けられた私は…
「あ…っん！」
ため息まじりの
甘いあえぎ声を
こらえることが
できなかつた。



あなた…

私は……



「いや…っん…あー!」
あなたにしか聞かせたことのない
甘えた声…、あなたにしか許したこと
ない私の身体…

…この「」に奪われる…
なで回され、
舐め回されながら、
押し寄せる快感に
耐えながら私は…

彼の愛撫に
ビクンビクンと反応
してしまう身体を無理に
抑えつけながら
私は……あなた…



私は...

あ!あ...っん



「ユキ...いっパイ
可愛がってやる」

抗う言葉さえ
失い...彼に身を
まかせるしかない
まま...

「あ...あ...っ!」



激しく、荒々しく、野性的な
この愛撫に...あなた...



「ユキ…おれのメスになれ！」

「あ…！」

私は濡れていた…。

お尻にむしゃぶりつく彼の唇に…

形をゆがめるほど

なで回す彼の手に…

スーツの上から私の中にまで

食い込ませようとする指に…。

あなたから私を強引に奪い

取ろうとするその言葉に…。

私の身体は十分に応え、

彼を迎え入れるための蜜を

溢れさせた…。

「あ…あつ…っ」

彼は私のメスの匂いを嗅ぎ取り、ソコに顔を強く埋めた。

「もっと足ヲひろげろ、ユキ」

「だ…め、だめ……！」

そう言いながらも私は

拒む想いとはうらはらに

彼の顔に股間を

擦り付けた…。

そして彼は

鼻から音をたてながら

ソコを嗅ぎ続けた。

溢れ出る私の

メスの淫らな匂いを…。

「ユキ…全部見せて…ユキの全部…」



さらけ出してしまっ…。
はしたなくこのオスを求める
私を…。

彼は
力まかせに、
びりりッ！
…と私のスーツを
引き裂いた。

あなた…、
私……………

見られてる…。
あふれる蜜をしたたらせ、
お口を開きヒクつかせて
しまっている私の一番
恥ずかしいところを…。



恥ずかしい……

あなた以外の……しかも異星の、
おそらく私よりもはるかに年下の
男の口の眼前に私のすべてを晒してしまった……。
みっともなく欲しがっているトコ口を……。
けれど、彼はそのことを喜んでくれた。
滴る私の恥蜜を喉を鳴らせながら
舐め、飲み込んだ。

「あー！ううっ……ん」

私はお尻を震わせ、
彼のためにその蜜を溢れ出し続けた。

「だ…め！あ…！」

この…決して受け入れてはいけない快感に
私の身体はたちまち悲鳴をあげた…。

そのヒダを、そのヒダの中を、
クリトリスを…、そしてお尻の穴を…。

しつこく、美味しそうに

舐めなわし続ける彼の舌の動きに
あわせるように私は腰を
くねらせた…。

まるでおねだりするように…。

そして

「う…！っ…あ…！」

…私は全身を痙攣させ、登り詰めてしまった…。

夫の優しいそれとは違う、

荒々しく、乱暴で強引な彼の愛撫に…。





経験したことのない
快感に戸惑い、
身体を震わせて
涙を流す私に…、
彼は優しく頬を
撫でながら…



口づけをくれた…。

そして私は…



私のほうから舌をからめ、
彼が流し込む
彼の唾液を求め、
すべて
飲み込んだ…。



夫を裏切り、
許されぬ喜びに
溺れてしまった
この私を慰めるような
このキスが…
嬉しくて…。



「ユキ…これやる…
才前のモノ…」
彼は地球人のそれより
大きく、熱く、卑猥な
形をしたものを
私の顔に押し当てた…。



まるで
飢えたメスが
むさぼるように…

喉の奥まで迎え入れ、
舐めあげて、彼のものと
そこから溢れ出る汁を味わった。



「私の…もの…」
私は…なんのためらいもなく、
強烈な臭いのするそれを口にふくみ、
しゃぶりついた。



アッ...

アッ...



何度も...

何度も...、私の口の中に
大量に放出される、喉が焼けるほど熱く
野生の臭いにみちた、その濃厚な濁液を
飲み干した.....。
彼に頭を抱えられたまま.....。

アッ...



「ユキ……才前はコレデ
俺のモノ……」

あなた……許して……

私はもう……

彼を拒むすべも、

はねつける心も失い……

メソク……



あ……

ずーんぜんぜんー！！

「…っああ！……あ…っん！」

私は…彼の逞しいものを私の中…、
一番奥深くまですべて受け入れ、
淫らにあえぎ…絶頂を得た…。

突き当たりまで届いたと同時に
私の子宮に大量にぶちまけられた
彼の子種が、私のすべてを
塗りつぶしていくのを感じながら……。

繰り返し、繰り返し、登り詰め続けた…。



私の乱れ、もたえる姿は彼をさらに興奮させた…。
彼のものはまったく衰える様子もなく
射精を続け、乱暴に私の中をかきまわした。

ズツ！ズプツ！ぐちゅっ！

私のそこははしたなく音をたて、汁を溢れさせた。

「あ！あああっん！マ…ラーく…んっ！あ……！」

あまりの快感に私は震え、身をよじらせ、
下半身を痙攣させながら…イキ続けた…。

何度も…。 何度も…。



やがて…
激しすぎる
彼のセックスに
いつのまにか

私の腕を
拘束していた
つるが
ほどけても…

私は自ら身体を
開き、彼をむかえた…。

「抱いて…もつと…
…マラーくん…
私の全部を
あなたのモノに
してちょうだい
……」

「ユ…キ…」

「大事にする…」



「俺のユキ…
俺の子ども…
産メ…いっハイ…」

ひとつになった私たちは
しがみつきあい
離れなかった…
まるでお互いの
体液すべてを
入れ替えて
しまうように……
彼は私の中で
果て続け、私は
そのたびに
いき続けた…。



何度も…



何度も…



何度も…

いったいこの時だけでどれほどの
彼の子種を私は飲み
込んだのか…。

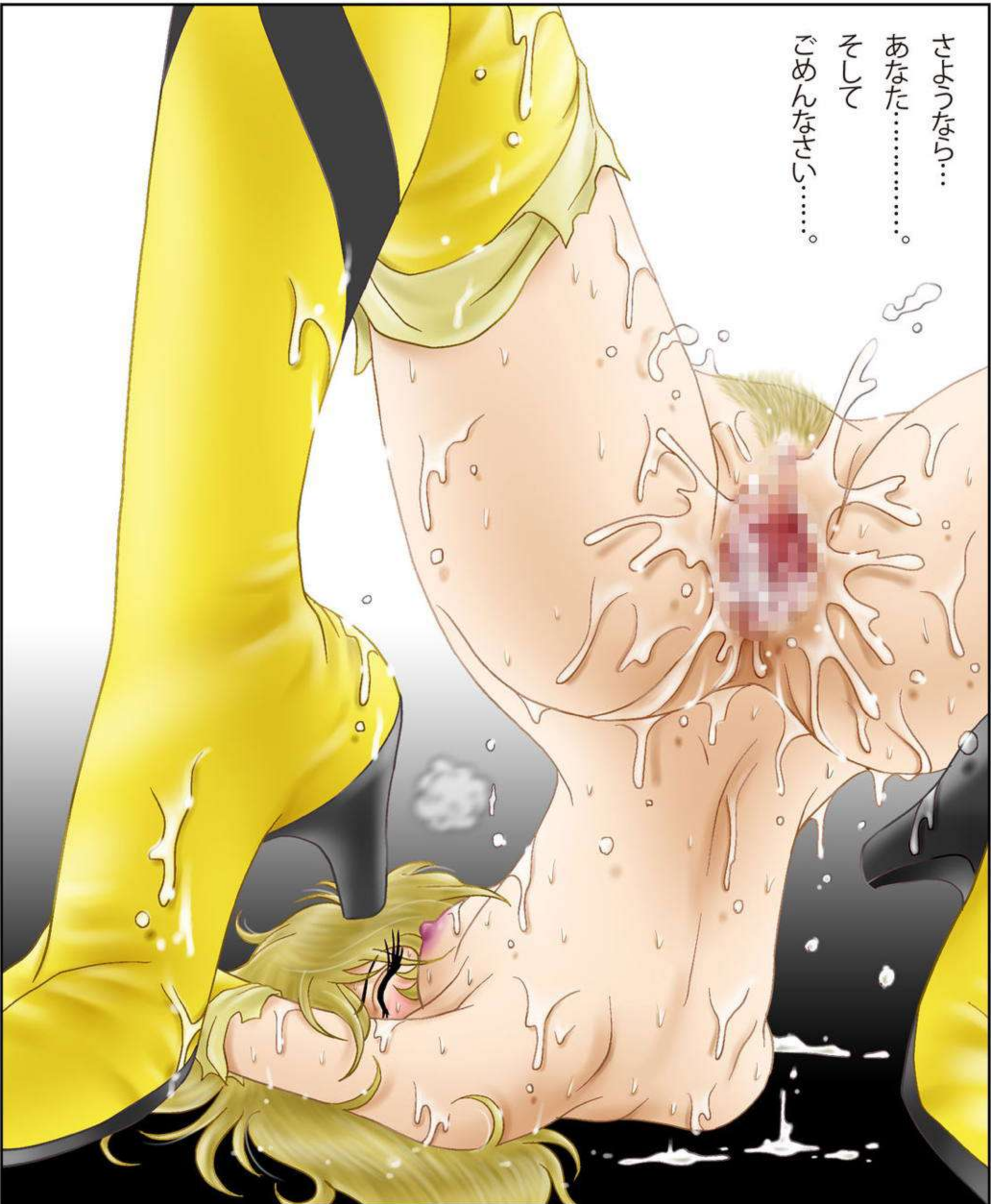
そして彼に犯されながら
いったい何度の絶頂を
味わったのか…。



私はもう
彼のモノ…。

私のすべてを
ささげ、彼に
愛され続け
たいと、
心から願った。

さようなら…
あなた……………。
そして
ごめんなさい…………。





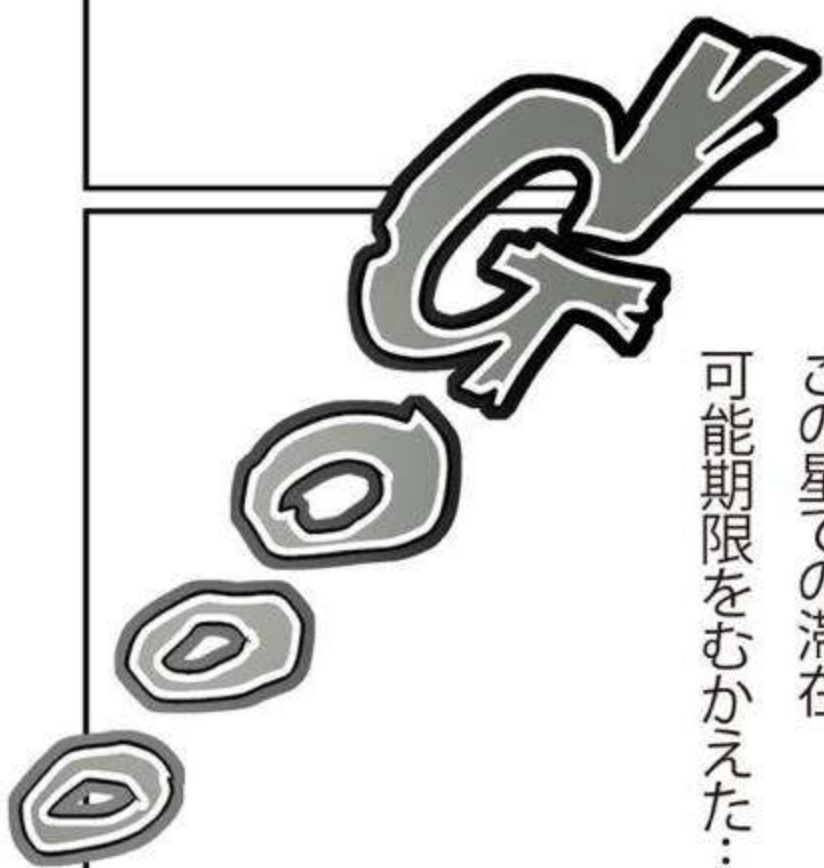
私はもう、
そこへは
戻れません…。




このコの子種を大量に植えつけられた私は、
ここで彼の子供を産み、彼に愛され、
彼に抱かれ続けます……………。



やがて…私の艦は
この星での滞在
可能期限をむかえた…。





私ひとりを残して艦は旅立った…。
それを彼の住みかから見送りながら、
私は私の青春のすべてに別れを告げた…。

さよなら…宇宙戦艦YAMATO…。



SAYONARA YAMATO

by SHICHIYOU 2013.02